

# 「職業指導」の概念と目的に関する研究

西 村 耕

## はじめに

今世紀初め、F. parsons が初めて用いた職業指導 (vocational guidance) なる用語は、今日では広く用いられ定着したかに見える。しかし現実には、その意味内容は相当多義にわたり、あいまいな概念として用いられているといわざるを得ない。

今半世紀、職業の種類、形態は経済機構や科学技術の発達の影響を受けて、著しく変化してきた。一方、教育思想や教育技術も大きく発展してきた。

現実の経済社会の中で、又教育体制の中で、職業指導は如何なる意義を持つものであるのか、如何なる角度から考究すべきであるのか、あらためてそれを問う前提として、職業指導を最も端的に表現しようとしている諸家の定義を分析し、検討を加えようと試みるものである。

先ず、諸家の定義及び公的機関の定義或は規定をあげて検討する。次いでそれらに含まれる概念を整理し、最後に諸定義にふくまれている目的について論究する。又それについての論者の立場・主張を論述する。

## 第一節 職業指導の定義

### 1. アメリカにおけるもの。

Parsons, F.

職業指導運動の創始者であった彼が、Boston における実践について詳述した『Choosing a Vocation』が1909年出版された。彼は、職業指導を規定して「Vocational Guidance は職業の選択、そのための適切な準備、就職、成

功の獲得である<sup>(1)</sup>」としている。又「①自己の明確な理解（能力，適性，興味，願望，限界，その他の資質）②職業的成功に必要な条件に関する知識，③上記二つの要因の間の関係を正しく推論すること，が必要である<sup>(1)</sup>」としている。彼によれば，職業指導を担う者の主要な機能は，個人についても，<sup>(註1)</sup>職業についても，正確な情報を収集することの援助，及び正しい推論ができるように援助することである。「誰も人がどの職業を選ぶべきかをその人に代って決定することはできない。しかし，誰でも，人が自分で賢明な決定をすることができるように，そして，当面する問題に対処できるように，彼を援助することはできる<sup>(2)</sup>」と記している。彼の職業指導における基本的考えの一つは，人は自分自身を分析する力を持ち，それに基づいて賢明な決定をする力を持っている。それが可能なように援助すべきであるとするものである。ここに自己分析，職業分析，両者の関係の正しい判断，そのための援助という，その後の職業指導運動の基本となる概念が示されている。

#### Brewer, J.M.

彼は，1918年に著わした『職業指導運動<sup>(3)</sup>』の中で，「職業とは，職業に関する知識と個人に関する知識を基盤として，個人が職業を選び職業に対し準備をし，職業に進み，職業について進歩することにつき，知識を与え，助言し，協力する組織的努力」と定義している。この中に，後日N V G Aが発表した定義の原型をみることができる。

#### Payne, A. F

1923年，彼は職業指導を定義して，「職業的（及び教育的）助言 Vocational (and educational) Advisement とは，個人の特徴をテストし，測定し，評価した後，かれの个性的発展と（職業を通しての）その機会が最大となるような職業的進路に関して助言する科学的な過程である<sup>(4)</sup>」としている。Payneはその後，1925年『職業指導の組織』を著わし，そこでは誰もが納得できる権威ある定義はまだないとしながらも，比較的妥当と思はれるものとして，上記の

## 「職業指導」の概念と目的に関する研究

Parsons, Brewer 及び彼自身の三定義を紹介した<sup>(5)</sup>。

Myers, G. E.

彼によると、「職業指導は基本的には青年の持っている所の、金では買えない生来の能力と、在学中に青年に準備される高価な訓練とを保存する努力である。それは個人には最大の満足と成功を、社会には最大の利益をもたらせる場所に人間資源を投資し使用すべく、個人を援助することによって総ての人間資源の最大の富裕を保存すべく努めている。<sup>(6)</sup>」としている。彼は青少年に対し、職業選択に必要な情報を与え、職業の準備をなし、<sup>(註Ⅱ)</sup> 就職後の補導をすることは、歴史や数学を教えるのと同様に、本当の教育的サービスであると述べている。

米国職業指導協会

National Vocational Guidance Association

NVGAは、1921年に最初の定義を下し、その後1924年と1930年に訂正し、更に1937年に再訂正した。それによると「職業指導とは、個人が職業を選択し、その準備をし、就職しそこで進歩していくのを援助する過程である。それは、個人がその将来を計画し、生涯の経歴 Career を形成していく上での決定や選択—満足な職業的適応をもたらす上での決定や選択—をすることを援助することである<sup>(註Ⅲ)(7)</sup>」

1924年の定義をみると次の如くなっている。「職業指導とは、職業を選び、そのための準備をし、就職し、そこで進歩するように、情報、経験及び助言を与えることである。<sup>(註Ⅳ)</sup>」マイヤーズは、この両定義を比較し、そこに理念の発展があったことを指摘している。<sup>(8)</sup> 1924年の定義では、情報、経験、助言の提供すなわち個人に対して何かを与えることであり、指導を受ける者から言えば受動的立場にとどまる。これに対し、1937年の定義では、選択し、決定する個人への援助であり、何かを為す個人の主体性が強調されている。

連邦教育局 U. S. Office of Education

「職業指導とは、社会のために、種々の機関から特別な訓練を受けるなかで、彼の天賦の才能を発見し活用できるよう、さまざまな方法に習熟させる過程である<sup>(9)</sup>」

そうして連邦教育局は、ガイダンス計画によって実行さるべき活動として、次の六つをあげた。

- ① 職業情報
- ② 個人調査
- ③ カウンセリング
- ④ 実習訓練や探索経験の活用
- ⑤ 職業のあっせん
- ⑥ follow-up

Super, D. E.

NVGA の定義は、専門家が集まって、協議した末決定したものであり、米国では広く採用され権威あるものとされているが、スーパーは、NVGA 定義は、継続的な過程について述べているが、どんな継続の仕事が含まれているかが明らかでないと批判した。そうして、彼自らの発達理論の見地から再定義を提案したのである。

彼は、ビューラー (Bühler, C.) の人生段階説、ギンズバーグ (Ginzberg, E.) らの職業選択に関する理論、ミラー (Miller, D. C.) とフォーム (Form, W. H.) のキャリア類型論、ハーガスト (Havighurst, R. J.) の発達課題等の影響を受けた定義を下した。彼の特徴は、それまでは、主として人格理論や臨床心理学の用語であった「自己概念」(self concept) を中心としていることである。

「職業指導とは、個人が自己自身と、仕事の世界における自己の役割とについて、統合されかつ妥当な映像を発達させ、受容すること、この概念を現実

### 「職業指導」の概念と目的に関する研究

照らして吟味すること、及び自己には満足、社会にとっては利益となるように、自己概念を現実に移すことを援助する過程である。(註V)(10)

この定義は、職業指導が過程であるとする点、又個人の自主的活動に対する援助であるとする点においては、それまでの諸定義と同一の考え方に立つものであるが、次の二点において特徴ある定義である。

一は、職業的発達という長期的連続的概念をもちこみ、それによって、具体的諸活動を一貫する理論構成の可能性を示したこと。

二は、職業指導の中心に自己概念をもち来り、職業的発達過程における個人の内部的な心理構造と、その発展に重点をおいて、人格の統合性を強調したことである。

アメリカの職業指導運動は、1930年頃から広く人格の総合的発達をめざすガイダンスへの傾きを見せはじめた。1942年、ロジャース (Rogers, C. R.) が、個人の尊重、児童中心主義、自発性の原理を根拠とする非指示的カウンセリング(11)を創唱して、アメリカのガイダンス界に大旋風をまき起した。それまでの診断と治療を強調する指示派と、ロジャースの非指示派、さらに折衷派が加わって、激しい論争を繰り返した。その中でロジャースは、1947年「自己概念」なる概念を提出し、次のように説明している。

「① 行動を決定するときの決定要素は、個人の認知領域である。

② 個人は一定の条件を与えられるならば、自己知覚を含む認知領域を再構成することができる。この認知の再構成にともなって、適切な行動の変容が起こるのである。(12)」

1950年頃からは、対立する諸方法の間の調和を計るために、共通なものを求める方向に研究が進められはじめた。

スーパーの定義は、こうしたガイダンス運動を背景として下されたものであって、すぐれて心理学的傾向をもつものである。

Hale, P. P.

スーパーの定義に対しヘールは、「これは個人の望ましい全人的適応の全相を述べているにすぎない。『職業指導とは、の語に代えて、『教育とは、宗教とは、』という語を入れてみても、みなあてはまる定義にすぎない」と批判した。彼は彼自身の定義を次のように述べている。

「職業相談は、科学的考究を含み、職業選択に適用するに際して、人間行動に焦点を合わせる過程である。職業指導は、特に職業選択に関係があると認められる人間行動を取り扱う科学である。(註VI)(13)」

彼は、職業指導を教育的サービス体系としてのみ考えることを批判し、科学としての職業指導を主張している点に特徴がみられる。彼は、職業指導を単なる実践過程として組織づけるだけでは不十分とし、一つの学問としての成立を志向しているのである。彼はそのより所を、心理学、医学、社会学、教育哲学に求めている。

## 2. ヨーロッパ諸国における定義

ヨーロッパの文献には、はっきり定義をのべたものが少ない。次にあげる二つが代表的なものであろう。

### Claparède, E.

彼によると、職業指導の目的は、ある特定の個人（大抵は青年だが、しかし失職成人とか身体障害者でもよい）を、彼の精神的もしくは身体的性能にもっとも適合しているがゆえに、成功の機会がもっとも大きいような職業に指導することである。(14)」

### Myers, C. S.

彼によると「職業指導とは、求職者に対し、精神的及び身体的条件についての組織的な試験に基づき、彼が適している職業及び彼が適していない職業に関して与える助言をいう。(15)」

## 「職業指導」の概念と目的に関する研究

両者の定義をみて気付くことは、職業指導を、個人を適所に配置する活動であると理解している点である。これはヨーロッパの職業指導が、アメリカの教育的指導活動に比して、行政的政策としての特徴を色濃くもっていることを示している。

### International Labor Organization I. L. O.

国際労働機構が、第32回総会（1949年）の大会で、職業指導に関する勧告を採択したが、その中で職業指導を次のように定義している。「職業指導とは、個人の特性とその職業的機会とを考慮し、個人が職業選択および職業的進歩に関する問題を解決するのを援助することをいう。(註Ⅶ)(15)」

この定義は、やはりパーソンズ以来の伝統的考え方を基底とし、NVGAの定義からも多分に影響されたものとみられる。

### 3. 吾国における定義

吾国において最初に職業指導なる語が用いられたのは、大正4年12月に出版された、入沢宗寿著『現今の教育』第6章「職業教育」の項であるとされている。とすると、1908年、パーソンズが Vocational Guidanceの語を用いてから、わずか8年後にして吾国で用いられたことになる。

以来、職業指導について、その目的、内容、運用の指示等を含む定義が種々下されてきた。ここでは、研究者によって定義された主たるものと、公的機関によって発表されたものをそれぞれ年代を追ってあげる。

#### 淡路圓次郎氏

淡路氏は、わが国における職業指導の啓発期において、次のように定義した。

「職業指導とは、一定の個人を適職に配置せんがために、忠言、知識、または訓練を与え、かくて将来その個人が成功して自ら生活の安定を得、また有為

の人物となって社会に貢献できるように指導することをいう。すなわち職業指導は、適材配置を直接目的とし、個人の幸福および社会の福利の増進を二次目的とする社会的教育的活動である。(16)」

水野常吉氏

「職業指導とは国民の活動能率を増進せんがため、卓見を有する指導者が、被指導者の個性を家庭・環境・教育・心理および医学上の立場より科学的に行える調査研究を基礎とし、各種職業に関する該博なる知識を照合して、各人を最大発展可能職業に配置せんがために、その選択・準備および将来の向上を計るに当たり、必要なる知識を与え、助言し、協力せんとする公私の組織的努力をいう。(17)」

この定義も、わが国の時代的色彩を反映して、淡路氏と共に、他律的指導の考え方が強いものである。

岡部彌太郎氏

前の二氏が定義してから数年後、吾国の職業指導活動が発展期に入った頃、岡部氏は次のように定義した。

「職業指導には広狭二つの意義がある。狭義のものは（中略）直接職業に入らんとする場合の職業の選択に関する指導である。しかしより普通には、かかる狭義の職業指導をその中に重要なものとして有しつつ、さらに大きな範囲をもてるものを意味する。すなわち単にあの職業か、この職業かの選択だけでなく、正しき職業生活への指導のために全活動を意味し、したがってその一部として当然教育指導を含むものである。(18)」

職業指導を広狭二つにわけた点がユニークである。狭義の職業指導は教育指導と併立すべきものとして位置づけ、正しい職業生活のための全指導を広義の職業指導とした。この考えによると、教育指導は広義の職業指導に含まれるものとするのである。



## 「職業指導」の概念と目的に関する研究

増田幸一博士

「職業指導とは個人をしてもっとも適した職業につかしめんとするための研究・教育および実際上の仕事をいう。(19)」

博士は、職業指導の範囲を研究・教育・実際上の仕事に三分した。研究とは理論および方法の基礎、教育とは知識・技能・心得を教えること。実際上の仕事とは個性調査・職業調査・選職および進学指導であるとして、職業指導の領域を明確にした。

桐原葆見氏

「各個人が自由に職業を選びそれにつくについて、適切な案内と助言をなし、それによって将来の職業においてよく適応して有用な社会の成員たらしめようとする。教育的実践である。それゆえ広い意味では、それは教育のすべての実践の主たる目的の一である。したがって学校におけるあらゆる教育課程はすべて職業指導に関係するものであるが、狭義には、職業の選択と就職とについて直接必要な案内と助言とをすることを意味する。(20)」

氏によると、広義の職業指導には学校における教育活動の全領域に広がるものとし、職業指導の教育としての働きを、きわめて重視したものといえよう。

福山重一博士

「職業指導とは教育現象と経済現象とにその足場を得ながらこれらを止揚して成立する独自特有の現象であって自己分析、職業分析及び職業試行より成る職業選択能力養成と就職又は進学及び補導より成る職業選択結果吟味の二部より構成されている。(21)」

それまでの定義は、職業指導を教育的サービス過程としてとらえ、その目的、意義、方法等を羅列したものが多かった。この定義は、職業指導を初めて弁証法的認識論をもって根源的にとらえ、選職能力の養成と職業選択結果吟味を理論的構造としてもつ独自特有の学的領域を樹立したもので、画期的定義で

ある。

次に公的機関によって定義されたものをあげる。

#### 日本職業指導協会

日本職業指導協会編の『職業指導概論』に定義をのせているが、独自のものではなく、NVGAの定義とほとんど変りない。

「職業指導とは、個人が職業を選択し、その準備をし、就職し、進歩をするのを援助する過程である。職業指導は、個人が将来を計画し、進路を開拓することに含まれている決定と選択——満足すべき職業上の適応をなしとげるに必要な決定と選択をなすことを援助することに関係するものである。(22)」

日本職業指導協会の前身大日本職業指導協会は、職業指導の要旨として次のように発表した。

「職業指導は青少年に対し職業に関する正当なる理解を得しめ、且つ之に関する思想を明確ならしめると共に身心の諸傾向を科学的に考察して、一方職業の準備をなし、且つ選択並に就職を適当ならしめ、就職後の向上をはかり、他方又上級学校に入学せんとするに際して、之を善導するを以て要旨とする。(23)」

次に文部省が発刊した文書の中で示した定義を年代順にならべると、

#### 『学習指導要領』（職業指導編）昭和23年

「職業指導は個人が職業を選択し、その準備をし、就職し、進歩するのを援助する過程である。」

#### 『職業指導の手引』昭和24年

「職業指導とは、個人が生計費を得て、自己および社会のためにもっとも有

## 「職業指導」の概念と目的に関する研究

益に生活するために、個人に職業訓練を与えた上に、その天賦の才能を発見し、活用することを援助する過程である。」

### 『中学校・高等学校職業指導の手びき』（管理運営編）昭和30年

「学校における職業指導は、個人資料、職業・学校情報、啓発的経験および相談を通じて、生徒みずから将来の進路の選択・計画をし、就職または進学して、さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する力を伸長するよう教師が教育の一環として、組織的継続的に援助する過程である。」

この定義には、それまでに見られなかった特徴がいくつか含まれている。第一は、それまで生徒を指導する、助言する、援助するとなっていたものが、「生徒みずから将来の進路を選択し……」と、それまで以上に生徒の自主性を強調している点である。第二は「さらにその後の生活によりよく適応し、進歩する能力を伸長するよう……」と能力の伸長を謳った点である。これは、教育基本法第36号第2項の「将来の進路を選択する能力を養うこと」と共に、職業指導が教育現象としてあることを示したものと云える。最後に、「教師が教育の一環として、組織的継続的に援助する……」と組織的努力を明文化した点である。以上の三点は、その後の文部省の定義を方向づけたものとして重要な特徴と言わねばならない。

### 『中学校・高等学校進路指導の手引』

（高等学校ホームルーム担任編）昭和50年

「進路指導は、生徒の一人一人が、自分の将来の生き方への関心を深め、自分の能力、適性等の発見と開発に努め、進路の世界への知見を広めかつ深め、やがて自分の将来の展望を持ち、進路の選択・計画をし、卒業後の生活によりよく適応し、社会的・職業的の自己実現を達成していくことに必要な生徒の自己指導能力の伸長を目指す、教師の組織的・継続的な指導・援助の過程であ

る。」

#### 4. 職業指導に関連ある吾国の法規

憲法22条 昭和21年11月

「何人も、公共の福祉に反しない限り、居住移転及び職業選択の自由を有する。」

学校教育法第36条第2項 昭和22年3月

中学校の教育目標をあげた中で

「社会に必要な職業についての基礎的な知識と技能、勤労を重んずる態度及び個性に応じて将来の進路を選択する能力を養うこと。」

学校教育法第42条第2項 昭和22年3月

高等学校の教育目標をあげた中で

「社会において果さなければならぬ使命の自覚に基き、個性に応じて将来の進路を決定させ、一般的な教養を高め、専門的な技能に習熟させること。」

児童憲章第7項 昭和26年

「すべての児童は、職業指導を受ける機会が与えられる。」

職業安定法第2条 昭和22年

「何人も、公共の福祉に反しない限り、職業を自由に選択することができる。」

職業安定法第5条4号 昭和22年

「この法律で、職業指導とは職業に就こうとする者に対し、その者に適当な

## 「職業指導」の概念と目的に関する研究

職業の選択を容易にさせ、及びその職業に対する適応を大ならしめるために必要な実習、指示、助言そのたの指導を行うことをいう。」

### 職業安定法施行規則第2条

「公共職業安定所はできるだけ多くの職業について求人開拓に努めると共に、求職者に対しては、できるだけ多くの適当な求人についての情報を提供し、他により適当な求職者がいない場合においては、その選択するいかなる職業についても紹介するよう努めなければならない。」

## 第二節 職業指導の概念

以上、職業指導の主たる定義を顧みたのであるが、先にあげたペイン（Payne, A. F.）は、諸定義にのべられている概念の集約を試みた。彼は当時（1925年）すでに103の定義があったと報じた。彼はそれらを分析して241の事項をとり出し、さらに18事項に整理した。

1. 職業の選択
2. 職業情報
3. 個人の評価
4. 修学指導
5. 産業の研究
6. 自己発見と自己理解
7. 教育としての職業指導
8. 職業指導の方法
9. 職業指導が行わるべき時期
10. 職業指導に当たるべき人
11. 学校における課程変更の指導
12. 職業配置（就職）
13. 就職後の監督

14. 昇進と適応
15. 性格助長的手段としての職業指導
16. 能率確保的手段としての職業指導
17. 産業における職場変更の指導
18. 社会における進路変更の指導<sup>(24)</sup>

このように諸家の定義には、多くの因子がふくまれていることに気付くのである。

現在用いられている職業指導なる概念は、研究者の立場により、上記の諸因子をそれぞれの傾向をもって含んでいるが、どの定義にも一応共通してみられる概念は次のものである。

- (1) 職業指導は継続的な一連の過程である。職業指導は、職業を選択してから、その職業に適応し、満足して生活するに至るまでの一連の活動である。このことを過程 (Process) という言葉で、はっきり表現しているのはNVGAとスーパーであるが、他の定義にも過程であることを示す内容のものが多い。
- (2) 職業指導は援助活動である。援助 (assist) 活動であると文中に明記しているものは Parson's にはじまり、NVGA, スーパー, ILO, 日本職業指導協会, 文部省等と数多い。その他助言であるとするもの、指導であるとするもの、或は組織的努力とするもの、科学であるとするものなどがある。かつては他律的ニアンスをもった定義が多かったが、今では個人の主体性を重視するものが多い。
- (3) 職業指導を構成している内容は、職業の選択、職業の準備、就職、職業生活への適応である。

およそ職業指導の定義で、この四つのいずれかをふくまないものはない。あるものは四つのすべてを、又あるものは一部を中心に他を別の表現でとりあついている。その他に才能の発見と成熟、人間行動の究明、教育指導、研究・教育・実践、職業的発達、自己概念等がある。中でも、スーパーの自

## 「職業指導」の概念と目的に関する研究

己概念の形成を本義とする職業的発達への援助が職業指導であるとする意見は注目されている。

### 第三節 職業指導の定義及至概念についての論者の立場

先にあげたNVGA、日本職業指導協会、文部省等の定義に共通する概念、すなわち職業指導を職業の選択、準備、就職、及び職業生活への適応について、継続的に援助する活動であるとする提唱は、職業指導の活動内容を示すものとして、十分意をつくしたものであると考える。

一方、スーパーの言う自己概念の成熟を目指した職業的発達への援助を職業指導とする考えは、職業の選択から適応までの諸活動を一貫する視点を果たたことであり興味深い。発達概念を職業指導にとり入れて理論構成することは必要であろう。

そもそも自己概念は、具体的諸経験（働く生活状態）と、自己省察（反省する生活状態）によって形成される。<sup>(25)</sup> それは人格の総ての側面、すなわち、特性、能力、欲求、興味、価値観の発達に基づきながら、統合的に形成されるものである。

しかしながら、前者の定義の根拠は、個人差の心理学或は適性心理学に基づいた方法論的色彩の強いものであり、後者は、従来の適性心理学を容認するとともに、発達心理学的観点から職業選択と適応とに関する心理学的解明を行ったものにすぎない。

スーパーが言うように、職業的発達が、職業社会における自己概念の形成であるとするれば、それはすぐれた教育現象である。

一方、職業は経済現象に属するものであり、経済的論理をもつものである。職業は生きがいであり、又職業を通して人間形成がなされる。しかし、現実の経済社会においては、個々の人間性は疎外されることが多い。

我々は、この教育と経済とのはざまの中で、自己を理解し、生き方を発見してゆかなければならないのである。職業指導に独自特有の学的領域があるとす

れば、特にこの点にあるのではなからうか。

論者は、「職業指導とは、教育現象と経済現象とにその足場を得ながらこれらを止揚して成立する独自特有の現象であって自己分析、職業分析及び職業試行より成る職業選択能力養成と就職又は進学及び輔導より成る職業選択結果吟味の二部より構成されている」<sup>(26)</sup> という福山重一博士の定義に立脚しつつ、職業指導が学として成立しうる根拠について、なお一層の考察を試みようとするものである。職業指導が学として成立するには、単に技術的方法論にとどまる限りその根拠は薄弱である。目的論的見地からの説明があってこそより強固となるのである。

福山博士は、職業指導への通路として、人間を働く生活と反省する生活として把握されている。<sup>(27)</sup> 論者はさらに宗教的観点からせまる必要を強調するものである。

#### 第四節 職業指導の目的

次に、職業指導の目的は何であるか、これは職業指導の意義を論ずるとき看過し得ないものである。

定義は本来本質的な意味内容を示すものであるが、職業指導の定義をみると目的や方法上の原則をのべているものが多い。教育現象のように、常に目的を意識せざるを得ない現象の定義にはままたることである。

それらを見ると、二、三の型のあることに気付く。増田幸一氏は、目的には現実的目的と理想的目的とがあると指摘している。現実的目的とは、身近かにあって差当たり解決すべき当面の目的であり、理想的目的とは、時間をかけて実現に努力するもので、究極的目的ともいうものであるとしている。<sup>(28)</sup>

「個人が自己および社会にとってもっとも有益に生活しかつ生計を立てるために……」 Studebaker, W.<sup>(29)</sup>

「個人には最大の満足と成功を、社会には最大の利益をもたらす場所に人間資源を投資し……」<sup>(30)</sup> マイヤーズ。



## 「職業指導」の概念と目的に関する研究

「自らは満足を得ると同時に、社会に利益をもたらすこと……<sup>(31)</sup>」 スーパー

「その主たる目的は、国の労働力資源の最も有効な利用を考慮し、労働に対する個人の発展と満足のための十分な機会をこれに与えることである<sup>(32)</sup>」 ILO勧告1949年

「個人が生計費を得て自己および社会のためにもっとも有益に生活するために……」 文部省。

「国民の活動能率を増進せんがため……，個人を最大発展可能職業に配置せんがため……<sup>(33)</sup>」 水野常吉

「適材適所を直接目的とし、個人の幸福および社会の福利増進を二次目的とする。社会的教育的活動である<sup>(34)</sup>」 淡路円治郎

以上の定義にみられる国家・社会の発展・福利と個人の満足は、究極的目的と言えよう。

淡路円治郎氏は、直接目的と二次目的とにわけた上、個人の幸福・社会の福利はあくまで二次目的であり直接目的とすべきでないと強調している。

ジョーンズ (Jones, A. J.) は職業指導の目的を一般目的と特殊目的とに分けて、一般目的は「個人が職業を選らび、職業準備をし、就職し、職業において進歩発展するのを助ける。」ことであるとしている。又特殊目的としては11の項目をあげている。<sup>(35)</sup>

- 1) 諸職業の特徴・機能・任務・報酬に関する知識を得るのを助けること。
- 2) 諸職業の必要とする一般能力および特殊性能、熟練、年令、準備、性などを知ることを助けること。
- 3) 学校内で (トライアウトの形で) か、あるいは校外で (放課後および休暇中の実習の形で) か、職業経験をやる機会を与えること。
- 4) 職業の選択は個人が社会に対してなすべきサービス、職業によって得る個人的満足、性能、報酬、昇進などの条件、の3点に基づいて行わるべきものであるという観点を育成すること。

- 5) 職業情報を分析する方法を教え、かつかかる情報分析の習慣を作りあげること。
- 6) 自己について、すなわち自己について一般ならびに特殊能力 (abilities) 自己の興味、自己の力 (Powers) について、知るのを助けること。
- 7) 義務教育終了者および大学生の中で経済的に恵まれない者に、公共奨学金その他の援助を得て、修学を継続することができるよう援助すること。
- 8) 各種の教育機関の提供する職業訓練施設と、その入所資格、訓練期間、経費につき、知識を得るのを助けること。
- 9) 職業従事者が、自己をその職業に適応させること、また自己と他の従業者および一般社会との関係を理解すること、を助けること。
- 10) 学校や社会施設と商工などの実際界との緊密な協力によって、個人に確実な情報資料と助力を提供すること。
- 11) 速成的な職業訓練の広告に誘惑されること、または骨相・人相・星占い・筆蹟判断などの非科学的方法に迷わされること、の危険をさとするような知識を得させること。

以上のように彼の云う特殊目的は極めて、具体的で細かいものである。職業指導の目的というよりは、職業指導の活動内容と言い得るものである。一般目的としてかかっているものは、NVGA の定義と一致するもので、職業指導固有の中心的な目的である。彼の分け方によれば、職業選択能力の養成、適材適所配置、職業適応の促進、職業的発達、等がこの範疇に入ることになる。

文部省は昭和22年度の「学習指導要領職業指導編」で、日本職業指導協会と同じ定義を使用した。これは NVGA の定義を基本としたものである。さらに学校における職業指導の立場から、次のような細部にわたる目標をかかげた。

- 1) 各種の職業および職業人について理解をもたせること。
- 2) 就職および進学の機会について理解をもたせること。
- 3) 労働愛好の精神および態度を養成すること。

## 「職業指導」の概念と目的に関する研究

- 4) 職業および職業生活における研究的態度を養成すること。
- 5) 基礎的職業および応用の能力を養うこと。
- 6) 個性の自覚とその伸長をはかること。
- 7) 適当な職業を選択する能力を養うこと。
- 8) 適切な相談をすること。
- 9) 適切な就職指導をすること。
- 10) 適切な補導をすること。<sup>(36)</sup>

これはジョーンズの云う特殊目的に当たるもので、具体的活動の内容であり、身近かなさし当たっての活動目標と言えよう。

以上みて来たように、職業指導の目的は、三つの階層にわけられる。

第一は、個人の満足と幸福及び社会の福利と発展を志す究極的目的と云えるものである。

第二は、職業指導固有の本質的内容につながる現実的目的である。

第三は、身近かな具体的内容を含む、日常の実践目標である。

目的が現実から遊離した単なる理想論であっては、現実の実践に方向を与えるものとはなり得ない。又、現実を具体的に処理する実践目標のみであっても、職業指導の教育現象としてのあり方に生命を与えるものとはなり得ない。究極的目的と現実的目的或は実践目標が互に生命を与えつつ働いていかなければならないであろう。

職業指導の目的、とりわけ究極的目的とされるものは、それを支える思想を基盤にもったものでなければならない。

先にのべた、ILOの勧告、スーパー、マイヤーズ、文部省の定義等に見られる「国の労働資源の最も有効な利用、社会の利益」と「個人の発達と満足」とは、無条件に常に成立するものであろうか。米田博教授は、職業指導に内在する「人力活用」と「個人の発達」を次の表にまとめた。<sup>(37)</sup>

人間・職業関係の二類型

類 型	立 場	具体的施策	人 間 観	方 法
人 力 利 用	組 織 中 心	教育制度職業安定行政人事管理	部分的・固定的	個人間評価 職務分析
個人 の 発 達	個 人 中 心	教育としての「指導」	全体的・発達の	個人内評価 学習

「人力の活用」は、国家、企業等の組織が、組織の目的にてらして、個人を評価するものである。個人の発達、能力の開発、適応を願うにせよ、それは組織の目的、利益と共存する限界においてのみ許容されるものである。すなわち管理的発想を根底にもつものである。

「個人の発達」の主要な課題は、個人が満足し、自己を生かすために、組織の中でどう適応し、どう発達するかにある。すなわち教育的発想に立つものである。

職業指導の機能としてある配分的機能は前者に、発達の機能は後者に属するものであろう。又適応的機能は両者に属するものと考えられる。

社会をより豊かに維持発展させようとする、経済思想と、個人の価値を高く評価して尊重しようとする教育思想は、職業指導に対して社会経済的要請とし、個人的要請として、時には矛盾し、相反するものとして存在するのである。論者はこの両者を合一し止揚することにより、究極的目的の実現を可能ならしむる契機として、宗教的意義づけのあることを主張するものである。

(註I) In the wise choice of a vocation there are three broad factors: (1) a clear understanding of yourself, your aptitudes, abilities, interests, ambitions, resources, limitations, and their causes; (2) a knowledge of the requirements and conditions of success, advantages and disadvantages, compensation, opportunities, and prospects in different lines of work; (3) true reasoning on the relations of these two groups of

「職業指導」の概念と目的に関する研究

facts.

- (註II) Vocational guidance is fundamentally an effort to conserve the priceless native capacities of youth and the costly training provided for youth in the schools. It seeks to conserve these richest of all human resources by aiding the individual to invest and use them where they will bring greatest satisfaction and success to himself and greatest benefit to society.
- (註III) Vocational guidance is the process of assisting the individual to choose an occupation, prepare for it, enter upon and progress in it. It is primarily concerned with helping individuals make decisions and choices involved in planning a future and building a career……decisions and choices necessary in effecting satisfactory vocational adjustment.
- (註IV) Vocational guidance is the giving of information, experience and advice in regard to choosing an occupation, preparing for it, entering it, and progressing in it.
- (註V) Vocational guidance is the process of helping a person to develop and accept an integrated and adequate picture of himself and of his role in the world of work, to test this concept against reality, and to convert it into a reality, with satisfaction to himself and benefit to society.
- (註VI) Vocational counseling is a process which involves a scientific approach and focuses on human behavior as it applies to vocational selection.……Vocational guidance is the science dealing with human behavior, especially as it relates to vocational choice.
- (註VII) The term 'vocational guidance' means assistance given to an individual in solving problems related to occupational choice and progress with due regard for the individual's characteristics and their relation to occupational opportunity.

引 用 文 献

- (1) Parsons, F., Choosing a Vocation, Agathon Press, ING, 1967 original Edition Published 1909 p. 5
- (2) Parsons, F., 前掲書 P. 4
- (3) Brewer, J.M., The Vocational Guidance Movement, The Macmillan Co., 1918 p. 291
- (4) Payne, A.F., National Vocational Guidance Association Bulletin, Vol. 1 No. 7 (1923) p. 104
- (5) Payne, A.F., Organization of Vocational Guidance, Mcgraw-Hile Book Co, 1925 pp. 40-41
- (6) Myers, G.E., Principles and Techniques of Vocational Guidance, Mcgraw-Hill Book, 1941, p. 7
- (7) The Principles and Practice of Educational and Vocational Guidance, Report of the comunittee of the NVGA, Ocupations, May, 1937 p. 772
- (8) Myers, G.E. 前掲書 P. 8
- (9) Occupational Information and Guidance, U.S. Office of Education, Vocational Division Bulletin 204 1939 pp. 29-30
- (10) Supper, D.E., Vocational Adjustment: Implementing a self-concept, Occupations, November, 1951 pp. 88-92
- (11) Rogers, C.R., Counseling and Psychotherapy, Houghton- Mifflin, 1942
- (12) Pogcrs, C.R., Some Observation on the Organization of Personality. Amer-Psychologist, 1947, 2, pp. 358-368
- (13) Hale, P., Defining Vocational Counsering aud Guidance, Personnel and Guidance Journal, Dec. 1952
- (14) Claparede, E., Problemes and Methods of Vocational Guidance, International Labour Office, Studies and Report, Series J, No. 1, 1922 pp. 9-17
- (15) Myers, C.S. Industrial Psychology ir Great Britain, Jonathan Cape, Ltd., 1926 p. 108

「職業指導」の概念と目的に関する研究

- (16) 教育研究会編 職業心理学 昭 2. P. 581
- (17) 水野常吉 児童生徒の個性に適應せる職業指導法 明治図書 昭 3. P. 68
- (18) 岡部彌太郎 教育指導および職業指導 岩波教育科学 第17冊 岩波書店 昭 8.  
P. 1
- (19) 増田幸一 職業指導20講 三省堂 昭 10. P. 2
- (20) 職業指導の項 職業科事典I〔基礎篇〕平凡社 昭 25. P. 191
- (21) 福山重一 職業指導研究 文雅堂 昭 52. P. 91
- (22) 日本職業指導協会編 職業指導概論 実業之日本社 昭 25. P. 20
- (23) 小山文太郎 職業指導講話 培風館 昭 12. P. 129
- (24) Payne, A.F. 前掲書 pp. 37-39
- (25) 福山重一 前掲書 P. 94
- (26) 福山重一 前掲書 P. 91
- (27) 福山重一 前掲書 P. 94
- (28) 増田幸一 職業指導論 金子書房 昭 27. P. 28
- (29) Studebaker, T.W. The Occupational Information and Guidance Service:  
A Report of Progress, Occupations, April 1937, p. 581
- (30) Myers, G.E., 前掲書
- (31) Supper, D.E. Appraising Vocational Fitness, Harper & Brothers, 1949  
p. 92
- (32) 伊藤祐時 進路指導 理論と技術 金子書房 昭 52. P. 12
- (33) 水野常吉 前掲書 P. 68
- (34) 淡路円次郎 職業心理学, 教育研究会 昭 2. P. 581
- (35) Jones, A.J., Principles of Guidance, Mcgraw-Hill Book Co., 5 Edition,  
1963 pp. 161-162
- (36) 文部省 中学校・高等学校における職業指導の手引, 実業之日本社 昭 24.  
P. 4
- (37) 米田博他 職業指導 評論社 1972. p. 34-35

(本学教授)